

## 『源氏八景』の本文

——付、〈翻刻〉同志社大学蔵「源氏八景絵巻」——

岩 坪 健

はじめに

『源氏八景』とは、『源氏物語』の八場面から物語本文、または当該場面で詠まれた和歌一首を引用したものである。本稿では前者に限定するが、いずれの場合も中国の伝統的な画題である『瀟湘八景』に基づき、「帝木夜雨」「須磨秋月」「明石晚鐘」「松風帰帆」「朝顔暮雪」「乙女初雁<sup>①</sup>」「玉鬢晴嵐」「夕霧夕照」と題され、絵を伴うこともある。詞書の本文については、同志社大学蔵本について言及したことがあるが、他の伝本との比較は未だなされていない。そこで本稿では、調査に及んだ写本（計二一本）を取り上げ考察する。

### 一 『源氏八景』の伝本

二一本の写本は本文の異同において、三つのグループが見出せる。

『源氏八景』の本文

そこで便宜上、それぞれ一本の所蔵者名に基づき仮称を設け、グループごとに伝本を列挙する。まず略号を示し、次いで所蔵元などを記す。「卷子本」と示していないものは、すべて冊子本である。

### ○同大グループ（計五本）

- ・同：同志社大学図書館蔵。卷子本。詳細は注2の拙稿、参照。詞書の全文翻刻は、末尾にあり。
- ・九：早稲田大学図書館九曜文庫蔵。卷子本。
- ・書：書陵部蔵、特九四。桂宮、五〇二・五五。
- ・桃：東海大学桃園文庫蔵、桃八一・二〇七。
- ・祐：祐徳稲荷神社中川文庫蔵。

### ○京大グループ（計七本）

- ・京：京都大学文学部蔵、Mm・5。
- ・国：国文学研究資料館蔵、ナ2―489。「西湖八景」などと合写。

- ・夜：国文学研究資料館蔵、ア2―38。「夜の燈ともしび」所収。
- ・斎：斎藤報恩会蔵、「歌仙和歌集」所収。
- ・福：福井県立図書館松平文庫蔵、「集書」（仮称）所収。
- ・鶴：鶴見大学蔵、91335-G。
- ・思：『思文閣古書資料目録』第二五二号（平成二九年二月）に掲載。

○有栖グループ（計四本）

- ・有：書陵部蔵有栖川宮旧蔵、一〇九。「古六歌仙其他」所収。
- ・陵：書陵部蔵、一五二―一〇一。
- ・部：書陵部蔵、一五五―一〇九。「歌書集成」所収。
- ・先：書陵部蔵、「先代御便覧」第三冊所収。

○その他（計五本）

- ・仙：仙台市博物館蔵。
- ・園：東海大学桃園文庫蔵、桃八―二〇六。
- ・蘆：蘆庵文庫蔵。
- ・善：善光寺蔵。注①参照。
- ・加：都立中央図書館加賀文庫蔵。

右記の二一本のうち、絵を伴うものは同・思・仙の三本しかない。

このほか彦根城博物館に井伊家伝来の「源氏八景手鑑」があるが、絵のみであるので、本稿では扱わない。

二 『源氏八景』の書写時期

管見に及んだ二一本はすべて江戸時代に写されたが、書写時期が判明するのは、京（京都大学）本・鶴（鶴見大学）本・園（桃園文庫）本しかない。園本は本文と同筆で、「明和九壬辰年秋七月中旬」と記され、その年（一七七二）に写された。鶴本は巻末に、「前黄門菅長義書之 于時七十六歳」と記され、菅原長義が七十六歳の一七三六年に書写された。

京本の奥書は二つあり、適宜、句読点を付けて翻刻する。

明和五年の冬、此八景を散書にと、のへたてまつるへきよし仰をうけ給り、いなみ申かたく筆をとりぬ。散形をもとむるに先達のあとなしといへとも、道相伝のうへは、しゐて故人の跡にか、はらす、ふるき形をとり合て、あらたにつくりかきつけて奉りぬ。

権大納言兼胤

此一冊、恭徳院儀同殿御自筆の本を以て、うつし訖ぬ。努々外見あるへからざる者也。

光棟

文中の「儀同」は准大臣の異称、「恭徳院」は兼胤の号である。右記によると、明和五年（一七六八）に広橋兼胤（生没一七一五―八

一) が写したものを、竹屋光<sup>みつ</sup>棟(生没一七八一〜一八三七)が転写したと分かる。

それ以外で書写時期を推定できるのは、絵を伴う三作品(同・思・仙)と善(善光寺)本しかない。まず同(同志社大学)本の絵師は不明だが、詞書の筆者の極め書きが添付されていて、八人全員の官職が合うのは安永六年(一七七七)八月から同年十一月までである(注②参照)。

仙(仙台市博物館)本は逆に詞書は「堂上方」としか分ならず、絵は仙台藩五代藩主伊達吉村の手による。宮川葉子氏が示された『寛政重修諸家譜』によると、彼の生没は一六八〇〜一七五一年、五代將軍綱吉の諱を賜わり吉村と名乗るのは元禄九年(一六九六)である(注①の研究書、三四八頁)。よって仙本は同・園・京本よりも古く、一七三六年写の鶴本と同じ頃に成立したと推定される。

思(思文閣)本は六条有藤(一六七二〜一七二九)の極め書きによると、絵は石山基董(生没一六六九〜一七三四)、詞書の筆者は伏見中務官邦永親王(一六七六〜一七二六)・久我大納言惟通卿(一六八七〜一七四八)・松木大納言宗顕卿(一六五八〜一七二八)・醍醐大納言昭尹卿(一六七九〜一七五六)・大炊御門大納言経音卿(一六八二〜一七一四)・西洞院大納言時成卿(一六四五〜一七二四)・三条大納言公統卿(一六六八〜一七一九)・梶井宮道仁法

親王(一六八九〜一七三三)である。公家の六人はすべて大納言と記され、後の三人は権大納言が極官であるのに対して、前の三人は大臣にまでなっている。大納言に就任していた時期は、宗顕が一六八八〜九九年、昭尹が一七〇四〜二四年、惟通が一七一四〜二七年であるので、惟通が大納言に着任したとき宗顕はさらに昇進している。よって六人の官職から成立時期を判断することはできず、八人のうち最も早く亡くなった経音の没年(一七一四年)が制作時期の下限になる。

善光寺本は絵がなく、「源氏八景筆者」と題された筆者目録が付属している。それによると、兵部卿宮貞建親王・徳大寺故大納言実憲卿・千種故中納言有敬卿・冷泉前宰相宗家卿・阿野故宰相中将実惟卿・藤谷故前中納言為信卿・広幡大納言長忠卿・久我右大臣惟通公の八人であり、最後の久我惟通は思文閣本と共通する。また筆者目録のほかには木製の表示板があり、典拠は不明ながら「外題 一乗院宮尊祐法親王御筆」と墨書されている。宮川葉子氏の調査によると、最も早く没したのは千種有敬で、彼の没年(一七三八年)までに制作されたと考えられる(注①の研究書、三五四頁)。

以上の作品の成立時期から一八世紀に書写・制作されたことは分かるが、一七世紀まで確実に遡れるものは管見に及ぶ限り見出せない。

## 三 『源氏八景』の本文異同

『源氏八景』の文章の範囲を調べると、調査した二一本のうち祐（祐徳神社）本のみが長いが、ほかの二〇本は同じであるので、祐本は前後を追加したのであろう。次いで巻の配列を見ると、四本以外は巻の順に並んでいる。その順番を1〜8で示すと、祐本は12653478と配置されている。他の三本のうち部・有本は同じで78536412の順、先本は785の次に3の前半と4の後半、1の全文と3の後半、6、4の前半、2と続き、錯簡はあるが完本である。先本の原形が部・有本と同じであったと仮定すると、この三本に陵本を加えた四本は、以下に述べる本文異同において一群を成すので、有栖グループと命名する。それは「乙女初雁」において、有栖グループだけが一箇所抜けている。同（同志社大学）本の本文では、

こし、うやさふらふとのたま「へとおともせず御めのとこなり  
ひとりことをき、たまひ」けるもはつかしう

とある箇所で、「」内の本文が有栖グループのみ欠落している。おそらくその前後に「たまふ」があるため目移りしたのであろう。

このようなグループが他にもないか探すと、「須磨秋月」に見出せる。それは「入道宮のきりやへたつるとのたまひしほと」（同本）

の傍線部である。同大グループのみが「のたまひし」で、他本はすべて「のたまはせし」である。『源氏物語大成 校異篇』によると、前者は青表紙本系の三条西家本と河内本系、後者は三条西家本以外の青表紙本系と分かれる。

一方、京大グループは「玉鬢晴嵐」において、傍線を付けた箇所  
に独自の本文が見られる。

人なみくならんこともありかたきこと、おもひしつめつるを  
この人の物かたりのついでにち、おと、の御ありさまはらく  
のなにともあるましき御子ともみなものめかし（本文は同本に  
よる）

傍線部に関しては有栖グループも同大グループも同じであるのに対して、京大グループは「なみく」「身と」「なに、も」（または「なにしも」「御子とも、」と異なる。

「帚木夜雨」では「ついでに」という言葉の有無があり、有るのは京大グループ全本と仙・園・蘆・加本、無いのは同大・有栖グループ全部と善本に分かれる。

「明石晚鐘」は本文が系統により異なる箇所として、鎌倉時代から有名な部分を含む。

心ほそくすみたるさまこ、にゐておもひのこすことはあらしと  
すらむとおほしやらる、にものあはれ也（中略）まきの戸くち

けしきことにおしあけたり（本文は同本による）

傍線を付した三箇所のうち a と b は青表紙本系、c は河内本系と混在している。河内本系は a が「さまにて」、b が「あらしかしとすむらん人の心おもひやるに」、青表紙本系は c が「はかり」<sup>⑤</sup>である。同大グループの諸本はすべて同文で、青表紙本系の三条西家本と一致する。有栖グループと仙・園本は a b が同大本と同じ、c が「はかり」で、これは近世に流布した版本『湖月抄』の本文と合致し、青表紙本系である。京大グループと蘆・善本は「さまにて」「あらしかしとすむらん人の心おもひやるに」「はかり」で、これは a b が河内本系、c が青表紙本系の混合になる。加（加賀文庫）本のみが独自で、「さま」「あらしかしと住人の心覚しやら□る」（□の箇所は判読不可）「はかり」で、版本『首書源氏物語』の本文「さま」「あらしかしとすむ人のこゝろおほしやらるゝに」「ばかり」に似ている。<sup>⑦</sup>

以上の例はすべて、同じグループ内では異同が見られないのに対して、以下の例ではグループ内において本文が対立することもある。たとえば「夕霧夕照」の冒頭を見ると、京大グループと有栖グループの全本、および蘆本は「九月十日あまり山」であるが、同大グループは「九月十日あまり野山」（桃・祐）（仙・加）と「九月十日の山」（同・九・書）（園・善）に分かれる。青表紙本系と『湖月

抄』は同大本と同じだが、河内本系は「九月十日（日）よ日の野山」でまた違う。そのほか「まはゆけに」を欠くのが、同大グループの同・九・書のみで、当グループはさらに細分化される。

「松風帰帆」は大異がなく、「むかしの人」か「むかしの人」「あくかれて」か「あくかれ」の違いで分類すると、「むかしの人」「あくかれ」は有栖グループのみ、「むかしの人」「あくかれて」は京大グループ全本と同大グループの桃など、「むかしの人」「あくかれて」は同大グループの同・九・書・祐などとなる。これらは小異ではあるが、「夕霧夕照」と同じく同大グループは二分する。

「朝顔暮雪」は「しろきには」と「しろき庭には」の異同が目立つ程度で、「庭」を含むのは祐（同大グループ）・蘆・加の三本のみと『湖月抄』で、『源氏物語大成 校異篇』『源氏物語別本集成』にも「庭」の本文は見出せない。<sup>⑧</sup>

#### 終わりに

これまで取り上げた例は誤脱の可能性が低いものであり、実際には小異とはいえ更に多くの異同が見られる。たとえば『源氏物語』五四帖は大部であるので、一揃いの伝本であっても全巻の本文系統が合致するのは稀である。ゆえに『源氏八景』が巻ごとに本文の系統を異にしても不思議ではない。ただし同じ巻でも伝本により

本文が異なり、時には大きな異同が見られるのは何故であろうか。八場面の記事の範囲は共通しているので、原本は一つと仮定すると、他系統の『源氏物語』伝本で本文を校訂した可能性はある。たとえば『帚木夜雨』の末尾は「給つ」で、『源氏物語大成 校異篇』『源氏物語別本集成』も異同はない。同大グループの同・書本のみ「給ふ」であるが、これは誤写の可能性がある。京大グループの国・夜・斎・福・思は「つ」の横に「けりイ」と記し、鶴本は「給けり」である。このように異文の傍記が本文に紛れ込み、混合本文を生むことにより、異同が生じた可能性が考えられよう。

## 注

- ① 「初雁」は『瀟湘八景』では「落雁」であり、「乙女落雁」の例（加賀文庫本）もある。乙女の巻に「初雁」という言葉はないが、「落雁」よりもふさわしいとされたのであろう。宮川葉子氏は、「夕霧と雲井雁の幼恋は落雁ではなく初雁であると判断した結果であろう。」と推定された（『源氏八景』について——長野善光寺本を中心に——）、同氏『源氏物語の文化的研究』三四五頁、風間書房、平成九年。同氏『源氏八景帖』、『善光寺本坊 大勸進寶物集』二〇五頁、平成一年、郷土出版社）。
- ② 岩坪健「同志社大学所蔵 源氏物語絵の紹介」、『同志社国文学』八四、平成二八年三月。
- ③ ただし、思（思文閣）本の朝顔の巻や加（加賀文庫）本の夕霧の巻は末尾の文章を欠くが、これは脱落であろう。
- ④ 現在は日本大学所蔵で、影印が『日本大学蔵 源氏物語』（八木書店、平成六〇八年）として刊行されている。当写本は堂上で尊重され、たとえば一八世紀に活躍した冷泉為村も、その透写本を所持していた。詳細は『源氏物語 柏木』の解題（岩坪担当）参照（『冷泉家時雨亭叢書』第九九巻、朝日新聞出版、平成二七年六月）。なお、書陵部にも三条西家旧蔵本があり新典社の影印があるが、日本大学本とは本文を異にする。
- ⑤ 今川了俊が師の冷泉為秀の説に私見を加えて著わした『師説目見集』には、「けしきばかり」の一節は「源氏一の詞なりとそ定家卿は申され、けしきことに」の本文では「よ情のはるかにおとりて」と評している。詳しくは小著『源氏物語古注釈の研究』（和泉書院、平成一年）参照。ただし『源氏物語大成 校異篇』によると、青表紙本系の五本のうち三本は「ことに」、一本（底本）は「ことに」を塗り消して「はかり」を傍書している。
- ⑥ 『湖月抄』の本文は、延宝三年（一六七五）版（同志社大学蔵）による。
- ⑦ 『首書源氏物語』は和泉書院が刊行した、寛文一三年（一六七三）版（大阪女子大学附属図書館蔵）の影印による。
- ⑧ 『源氏物語別本集成』所収の前田本（尊経閣文庫蔵）は「しろき庭に」であるが、「庭」を消して「は」を補い「しろきには」に直している。

〔翻刻〕同志社大学蔵「源氏八景絵巻」

凡例

一、翻刻は原文のままを原則として、誤字・脱字・当て字・仮名遣い等も底本の通りにしたが、読解や印刷の便宜を考慮して次の操作を行った。

1 底本の旧漢字・異体字・略体は通常の字体に改め、改行の箇所には／を付けた。

2 誤写かと思われる箇所には、右側行間に（ママ）と記した。

3 「簾木夜雨」など八つの題目の下に、それぞれの文章の範囲を『源氏物語大成 校異篇』の頁数と行数で示した。

簾木夜雨（三六頁5行目～三七頁4行目）

つれ／＼と降くらししめやかなるよひの／雨に殿上にもをさ／＼人すくなに御とのゐ／所もれいよりはのとやかなるこゝちするに／おほとのおふらちかくてふみともなと／見給ちかきみつしなるいろ／＼の紙なる／ふみともひき出て中將わりなくゆかしかれは／さりぬへきすこしはみせんかたわなるへきも／こそとゆるし給ねはそのうちとけて／かたはらいいたしとおほしめされんこそ／ゆかしければしなへたるおほかたのは／かすならねとほと／＼につけてかきか

はし／つゝもみ侍なんのをかし、うらめしき折々／まちかほならむ  
たくれなどのこそ見所は／あらめとゑんすればやむことなくせちに  
かくし／給へきなどはかやうにおほそうなるみつし／なとに打をき  
ちらし給へくもあらず／深くとりをき給へりぬればこれは二のまち  
の／心やすき成へしかたはしつゝ、みるによくさま／＼なる物とも  
こそ侍れとて心あてにこれか／かれかなと、ふ中にいひあつるも  
ありもて／はなれたる事をも思ひよせてうたかふも／をかしとおほ  
せとことすくなにてとかく／まきはしつゝ、とりかくし給ふ

須磨秋月（四二四頁8行目～四二四頁14行目）

月のいとほなやかにさしいてたるにこよひは／十五夜なりけりとお  
ほし出て殿上の御あそひ／恋しく所々ななめ給らんかしとおもひや  
り給に／つけても月のかほのみまほられ給二千里外／故人心とすん  
し給へるれいのなみたもと、め／られす入道宮のきりやへたつると  
のたまひし／ほといはむかたなく恋しうおり／＼の事おもひ／いて  
給によ、となかれ給よふけ侍ぬときこゆ／れとなを入給はず

みるほとそしはしなくさむめぐりあはむ月の／都ははるかなれ  
とも

明石晚鐘（四六四頁3行目〜四六四頁8行目）

海のつらはいかめしうおもしろく／これは心ほそくすみたるさま  
こゝに／ゐておもひのこすことはあらしとす／らむとおほしやら  
るゝにものあは／れ也三昧たうちかくてかねの声松／風にひゝきあ  
ひてものかなしう／いはにおひたる松のねさしもこゝろ／はへある  
さま也せむさいとも／むしの声をつくしたりこゝかしこ／の有さ  
まなど御覽すむすめすませ／たるかたは心ことにみかきて月（つぎ）はれた  
る／まきの戸くちけしきことにおし／あけたり

松風帰帆（五八六頁6行目〜五八六頁12行目）

たつの時にふなてし給むかし人もあはれと／いひけるうらのあさき  
りへたゝりゆくまゝにいと／ものかなしくて入道は心すみはつまし  
くあくかれて／なかめゐたりこゝら年をへていまさらにかへるも／  
猶おもひつきせずあま君はなき給

かな御方  
かのきしに心よりにしあまふねのそむきし／かたにこきかへる

いくかへりゆきかふ秋をすくしつゝ、うき木に／のりて我かへる  
らむおもふかたのかせにてかきり／ける日たかへすいり給ぬ

朝顔暮雪（六五四頁1行目〜六五五頁1行目）

ゆきのいたうふりつもりたる上にいままも／ちりつゝ、松と竹とのけち  
めをかしうみゆる／夕ぐれに人の御かたちもひかりまさりてみゆ／  
とき／につけても人の心をうつすめるはな／もみちのさかりより  
も冬のよのすめる月に雪の／ひかりあひたる空こそあやしう色なき  
もの、／身にしてみてこの世の外のことまでおもひ／なかされおもし  
ろさも哀さも残らぬおり／なれすさまじきためしにいひをきけん／  
人のこゝろあさゝよとてみすまきあけさせ給／月はくまなくさし出  
てひとつ色にみえわた／されたるにしほれたるせんさいのかけ心く  
るしう／やり水もいといたうむせひていけの氷も／えもいはすすこ  
きにわらはへおろしてゆき／まろはしせさせ給をかしけなるすかた  
／かしらつきとも月にはへておほきやかに／なれたるかさま／くの  
あこめみたれきおひ／しとけなきとのゑすかたなまめいたるにこよ  
なう／あまれるかみのすゑしろきにはましてもて／はやしたるいと  
けさやかなりちるさきは／わらはけてよるこひはしるにあふきなど  
も／おとしてうちとけかほをかしけなりいとおほう／まろはさむと  
ふくつけかれとえもをしうこ／かさてわふめりかたえはひんかしの  
つまなどに／いてゐて心もなげにわらふ

乙女初雁（六八七頁5行目〜六八八頁1行目）

ねたまひぬるやうなれと心もそらに／て人しつまるほとになかさう  
しをひけと／れいことにさしかためなともせぬをつとさして／人の  
おともせずいとこゝろほそくおほえて／さうしによりかゝりてゐた  
まへるに女きみも／めをさまして風のをとのたけにまちとら／れて  
うちそよめくにかりのなきわたるこ／糸のほのかにきこゆるにおさ  
なき心ちにもとか／くおほしみたるゝにや雲井のかりもわかこと／  
やとひとりこちたまふけはひわかうらうたけ／なりいみしう心もと  
なければこれあけさせ／たまへこしゝうやさふらふとのたまへとお  
ともせず／御めのとこなりひとりことをきゝたまひけるも／はつか  
しうあいなく御かほもひきいれたまへと／あはれはしらぬにしもあ  
らぬそにくきや／めのとたちなとちかくふしてうちみしろ／くもく  
るしければかたみにおともせず

さま中にともよひわたるかりかねにうたて／ふきそふ萩の上か  
せ

玉葛晴風（七四一頁2行目〜七四二頁7行目）

くるれはみたうにのほりてまたの日／もおこなひくらしたまふ秋風  
たにより／はるかにふきのほりていとほさむきにも／のいとあは  
れなる心とにもはよろつおもひ／つゝけられて人なみく／ならんこ

ともありか／たきこと、おもひしつめつるをこの人の物／かたりの  
ついでにち、おとゝの御ありさまは／ら／／のなにともあるまじき  
御子ともみな／ものめかしなしたて給ふをきけはかゝる／したくさ  
たのもしくそおほしなり／ぬる

夕霧夕照（一三四五頁13行目〜一三四六頁12行目）

九月十余日の山のけしきはふかくみしらぬ／ひとたにたゝにやはお  
ほゆるやま風にたへぬ／木々のこす糸もみねのくす葉もこゝろあは  
／たゝしうあらそひちるまきれにたうとき／と経のこ糸かすかに念  
仏などのこ糸はかりして／人のけはひいとすくなくこからしのふき  
はらひ／たるにしかはたゝまかきのもとにたゝすみつゝ山／田のひ  
たにもおとろかすいろこきいねとも／の中にしりてうちなくもう  
れへかほなり／たきのこ糸はいとゝもの思人をおとろかしかほに／  
みゝかしましうとゝろきひゝく草むらのむし／のみそより所なけ  
になきよはりてかれたる／くさのしたよりりんたうのわれひとりの  
みこゝろ／なかうはひいてゝつゆけうみゆるなとみなれいの／この  
ころの事なれとをりから所からにやいとたえ／かたきほとのものか  
なしさ也れいのつまとの／もとにたちより給てやかてなかめいたし  
て／ちちたまへりなつかしきほとのをしにいろ／こまやかなる御  
そのうちめいとけうらにすきて／かけよはりたるゆふ日のさすかに

『源氏八景』の本文

なにこゝろ／なうさしきたるにわさとなくあふきをさし／かくし給  
へる手つき女こそかうはあらまほ／しけれ